頼宗を笑い飛ばす頼通
——頼通と頼宗、中外抄・続古事談・今鏡周辺——

渡辺有美

1　序

堀河右大臣頼宗について、以下のような説話がある。

『中外抄』において談話者藤原忠実は、上流貴族が晴れの場で話題とすべきことを順次列挙してゆくが、『中外抄』二六の第二段落には、次のような規範と頼宗と頼通の逸話が示されている。

① 次に、詩歌のことを語る。和歌の事は我より上臈に逢ひて、驕慢の自讃するもあしからず。故堀川右府は、宇治殿に逢ひ奉りて、「これは殿はえ知らせたまはじ。頼宗こそ知りて候らへ」とて、板敷を叩たかれけり。しかれば、宇治殿は咲はせ給ひけり。(1)

一方、『古事談』に模し、史話、朝臣の生活、有職故実、社寺・歌舞等の故事・伝説を収める『続古事談』は、この話をこう書承（推定）している。

『続古事談』第二（臣節）第五二話

② 堀川右大臣、宇治殿ノ御前ニテ和歌ノ事申テハ、「コレハ殿ハエシロシメサジ。頼宗コソシリテ侍レ」トテ、イタジキヲ扇ニテタヽカレケレバ、宇治殿ワラヒ給ケリ。和歌の事、自讃モアシカラヌ事ニヤ。(2)

この二つの説話の相違点は大きく三つある。第一に、この説話は、『中外抄』においては晴れの場における上流貴族の規範が列挙される過程のうちの一話である一方、『続古事談』では独立した説話として言談から切り出されている。第二に、言談の文章内容が倒置されている。『中外抄』においては、和歌の自讃は不都合ではないという規範が示されたうえで、その正当性を保証する実例として宇治殿（＝頼通）と堀川右府（＝頼宗）の逸話が後置される。一方『続古事談』では、頼通と頼宗の逸話が示され、末尾は「和歌の事、自讃モアシカラヌ事ニヤ。」と作者の自己判断とも窺えるような一文で締めくくられている。田中宗博氏は、「実際に説話が口語られた口伝・教命の場から、書承の世界へと説話が切り出されていく様相を示す実例」(3)と指摘している。第三には、頼宗（＝堀川右大臣）の行動が挙げられる。頼宗は『続古事談』において「扇で」板敷をたたいている。

さて、頼宗の和歌自讃を、頼通はどうわらったのだろうか。この二人はどのような兄弟関係にあったのだろうか。この両説話をもとにして考察をすすめることにする。

2　頼通・頼宗兄弟の関係

はじめに、官職経歴について述べる。

父は藤原道長、頼通と頼宗は、異腹の兄弟である。

頼通は、母は左大臣源雅信女倫子、道長の一男として、一条天皇在位二年目の寛仁元年（一〇一七）三月父からの譲位で二六歳という若さで摂政となり、後一条・後朱雀・後冷泉三代の長きにわたりその座にあったことなど、めざましい昇進を遂げた。道長の婚姻策が効果的にはたらいたためである。治暦三年（一〇六七）准三后となり、その後関白職を嫡子師実に将来譲渡するという約束のもと、同腹の弟教通に譲位し、宇治に隠退した。しかし、その後帝位は後三条天皇にうつり、藤原氏の専権は抑えられることになる。また、「恵和之心」（『春記』長久二年三月一四日条）の持ち主であるとされる。多くの意見を聞きながら政治を行っていたが、父道長存命中は専らその指示を仰ぎ、その影響か徐々に権勢志向となり、「関白忽諸公事」などと指摘されることもあった。

一方頼宗は、母は左大臣源高明女明子、道長の二男である。寛弘元年（一〇〇四）同腹の弟顕信とともに元服、同日従五位下に叙せられた。侍従、左右少将、美作権守などを経て寛弘八年非参議となり、長和三年（一〇一四）には一挙に権中納言に任ぜられ、以後右大臣従一位まで昇る。治暦元年正月出家、二月に歿した。居処に因んで堀河右大臣と称された。時の為政者の家柄にふさわしい昇進を遂げたが、道長嫡室倫子腹の兄頼通、また弟教通に終生昇進を先んじられた。しかし、父道長の威を藉ることはあった。人となりとしては、「いみじう色めかしうて、よろづの人ただに過ぐし給はずなどして、御方々の女房に物宣ひ、子をさへ生ませ給けるに…」（『栄華物語』八）などと好色であり、「かたち人」（同三六）である一方、「生前之間、唯修後世之業、…子孫雖多、皆不得近之…」（『続本朝往生伝』）と往生人の一人に数えられている。同腹の能信を硬派とすると、軟派に近い方であったらしいという井上宗雄氏の指摘[4]もある。

道長は鷹司殿（倫子）と高松殿（明子）を正妻・妾と区別しなかったといわれているが、実際は鷹司が必ずと言ってよいほど上位であり、頼通と頼宗の官職経歴の差も歴然としている。この件に関して頼宗にはある程度こだわりがあるとみえ、検非違使別当時代に父道長の介入に怒って職を辞そうとしたり（『小右記』寛仁三年一一月一六日条）、父の政敵であった藤原伊周の大姫君を正室としたり（寛弘八年、一八歳、三位中将時代『御堂関白記』年譜より）と、一見家柄に対して消極的な行動をとっており、興味深い。『小右記』万寿四年四月一五日条の車争い事件も、頼通に対する頼宗のこだわりがあったことを示している。

次に、文化面を対象に考察したい。

頼通・頼宗兄弟は不仲ではなかったらしい。頼宗は（妾腹の）分を弁えていたというのが通説である。また、前述①（『中外抄』より）・②（『続古事談』より）の説話内容からは、頼通・頼宗兄弟の役割分担が見えてくる。

前述したとおり、頼通・教通の鷹司腹兄弟は昇進めざましく、摂関家中心体制の政治面を担当した。一方、高松腹頼宗は、専らその文化面でのはたらきを自らに任じたらしい。頼宗は『今鏡』（ふぢなみの下第六絵合の歌）に

高松殿の御腹、堀河右大臣大臣、頼宗の大臣こそ、関白にはなり給はざりしかども、女御奉りなどし給ひ、末の君達も、近くまで位高くおはする、あまたきこえ給ひしか。…和歌の道、昔にも恥ぢずおはしき。歌詠みは貫之、兼盛、堀河の大殿、千載の一遇とかやある人侍りける。…[5]

とみえる。『今鏡』は、摂政関白については任大臣の年月日など年譜的説明を付すが、頼宗は唯一摂政関白をつとめなかったにもかかわらずこの

年譜的説明を持っている。頼宗に対する高い評価は、『今鏡』の作者の好みとも関係があると思われるが、頼宗が秀でた歌人として知られており、名声を獲得していたことに負うところがある。頼宗の歌は『後拾遺和歌集』『金葉和歌集』『詞花和歌集』また勅撰集にも多く入集し、直前に示した『今鏡』の部分では人口に膾炙した歌も数首挙げられている。家集に『入道右大臣集』がある。また、藤家音曲の始祖（『郢曲相承次第』）とも、香道に名を得た（『薫集類抄』）ともされている。このことからも、頼宗が所謂文化人であったことが窺い知れる。

平安京大内裏至近の地に広大な賀陽院を経営し競馬や歌合を催した頼通もまた、文化を好んだといえるが、十巻本『歌合』の編集や私家集集成、また多くの歌合の後援など、文化の後援者としての役割を果たしたとみえる。

頼通が後援し開催された歌合に、頼宗は出詠者や判者として参加している。長元八年（一〇三五）五月「賀陽院水閣歌合」や永承四年（一〇四九）一一月「内裏歌合」（頼宗出詠）、永承五年（一〇五〇）六月「庚申祐子内親王家歌合」や永承六年（一〇五一）五月「内裏歌合」また天喜四年（一〇五六）四月「皇后宮寛子春秋歌合」（頼宗判者）などがある。

『続古事談』第二（臣節）第一話には以下のような説話がある。

宇治殿、白河殿ニテ子日シ給ケルニ、義忠朝臣カナノ序ヲ書タリケル。殿、御衣ヲカヅケ給フ。東宮大夫トリツタヘ給ヘリ。

此日、四条中納言、祭主輔親マイラザリケル、殿ヨリ始テ、クチヲシキ事ニ人々ヲモヘリ。ヲノ〳〵家風をツタヘタル人ナレバナリ。(2)

東宮大夫は、逸話当時の頼宗の官名である。（頼宗の東宮大夫在任期間は、寛仁五年～長元九年（一〇二一～一〇三六）および長元一〇年～寛徳二年（一〇三七～一〇四五）の長期にわたる。）後半部では、頼通の時代における和歌の会合の一部が描かれている。公任の息定頼と重代の歌人輔親を「ヲノ〳〵家風をツタヘタル人」と評価していることからも、各々の伝統を重視して保存しようとした頼通の姿勢がみえ、その役割をもまた見出すことができる。

また、『今鏡』（ふぢなみの上第四　梅の匂ひ二）には、以下のような説話がある。

この大臣、歌などもよく詠ませ給ひしにこそ侍れ。その中に、堀河の右の大臣に、梅の花折りて奉り給ふとて、

折られけりくれなゐにほふ梅の花今朝白妙に雪は降れれど

と詠ませ給ひたる、いとやさしく末の世までとどまり侍れ。…(5)

この説話からは、頼通と頼宗が和歌を通して少なくとも不仲ではない関係を築いていることが窺える。

さらに、『続古事談』第二（臣節）の第二話には以下のような説話（「頼通の歌に経衡に代り、頼宗、返歌する事」）がある。

宇治殿、南面ノ紅梅ニ雪ノツモレルヲ御覧ジテ、人ヲ召テヲラセ給テ、

ヲラレケリ紅ニホフ梅の花ケサシタエダニ雪ハフレドモ

経衡ヲ召テ、此御歌ヲタマハセケレバ、経衡サハギテマカリタチニケリ。二三日アリテ、堀川右大臣、和歌ヲタテマツラレケリ。

ヲラレケル梅ノタチエニフリマガフ雪ハニホヒテ花ヤサクラム(2)

『今鏡』では、頼通（＝「この大臣」）が頼宗（＝「堀河の右の大臣」）に直接歌を贈ったことになっている一方、『続古事談』では経衡が登場し、頼宗の返歌が追加されている。経衡（一〇〇五～七二）は、中宮大進公業男で、母は山城守藤原敦信女、筑前守正五位下であり、和歌六人党の一

人である。頼通の庇護を受け、頼通八十賀にも献歌している。『続古事談』第八六話にも名前が見え、歌人として評価されていたらしいことが窺える人物である。また同時に、八六話には経衡が賀陽院歌合の欠員に選ばれたことも記されているから、本話にて経衡が頼通の歌の価値を理解しふさわしい返歌ができぬと見て慌てて退出したことは、その能力の一端を示していると考えられる。『続古事談』は、経衡を登場させることによって、頼通の歌が如何にすばらしかったかをより強調するとともに、返歌を追加することで、歌人としての頼宗の名声を（歌人としては、頼通以上に）引き立てているとみられる。頼宗の歌の後半部は、頼通の歌に比べてより高度であるといってさしつかえないだろう。本話の前話（『続古事談』臣節第一話）と同様、頼通時代の文事の盛んな様子を示す内容となっている。

3　まとめ

前述の事柄から、頼通と頼宗は、小競り合いや頼宗側の拘りはあったものの、少なくとも不仲（たとえば能信と頼通のように）ではなく、むしろ摂関家忠臣体制の政治面と文化面・文化後援者と文化実践者という役割分担を冷静にこなしていたらしいということがわかった。

さて、序において示した頼通のわらいという点についてであるが、冷静な役割分担という面からは、「頼宗はすばらしい歌人」という認識を前提として、頼通も頼宗を文化（作歌）実践者として認識していたことが窺える。すると、頼通のわらいは「話を笑い飛ばすことのできる人格を持っている」ということを示す、寛大さ帯びたものとなってくる。

さらに、『続古事談』の書承した『中外抄』の談話者藤原忠実は頼通の曾孫であるから、頼通は良く描かれていて当然である。このことからも、頼通のわらいは寛大なわらいである可能性が強いということが言える。

注

（1）『新日本古典文学大系　三二』中外抄　岩波書店　一九九七年六月発行

（2）『続古事談　注解』神戸説話研究会　一九九四年六月発行

（3）注2の【余説】

（4）井上宗雄「後一条・後朱雀・後冷泉朝の歌人たち（一）―頼宗・能信・師房　付　頼任・隆経―」（『立教大学　日本文学』　一九七四年三月発行　第三一号）

（5）海野泰男『今鏡全釈　下』パルトス社　一九八二年三月発行

参考文献

・『小右記』笹川種郎編　史料通覧　日本史籍保存会　一九一五年発行
・酒井みさを「上東門院研究　その二　頼通・頼宗・能信・長家・顕信―」（『実践女子大学文学部研究紀要』二七集　一九八五年三月発行）
・『和歌・俳諧史人名辞典』日外アソシエーツ株式会社　二〇〇三年一月発行
・『平安時代史事典』本編下　角川書店　一九九四年四月発行